

# ベトナムにおける日系企業の進出状況とグローバル人材像

— 付編：2013年度『都市経営学実習』報告 —

米 田 博 八 幡 浩 二

## 要旨

現在、政治・経済・文化といったあらゆる面において、これまでの国家や地域の垣根を越え、地球規模で様々な変化を引き起こす現象、所謂「グローバル化」が進行している。そうした中、特に我が国では海外へ進出する日系企業が急激に増加し、そうした動きに伴って「グローバル人材」の育成と確保が急務の課題となっている。ところで、グローバル人材とはどのような人材なのであろうか。また、日本の各大学ではどのような教育プログラムで人材育成していくべきであらうか。こうした問題は重要なことであるにもかかわらず、実は明確なビジョンは何ら示されていないのが現状である。

近年、日系企業の進出先として注目されている国の一つにベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）がある。本稿では、ベトナムにおける現地調査を通して、当国における日系企業の進出状況と、現地からみたグローバル人材像、及び本学（福山市立大学）におけるグローバル人材育成プログラムの現状と課題を示したものである。また併せて、グローバル人材育成に関連して、2013年度に実施した『都市経営学実習』の実習報告を行う。

キーワード：グローバル化、グローバル人材、日系企業、ベトナム

## 1 はじめに

近年、様々な分野において「グローバル化」が急速に進行している。特に、我が国の経済は国内の需要低迷や海外市場の展開など、海外へ目を向ける企業が増えつつある。そのため各企業は、海外に出て活躍できるグローバル人材の確保に努めている状況である。とりわけ、我が国においては諸外国と比べて、「グローバル化」という御題目が大きく叫ばれているように思えてならない。それには、我が国における特殊な地理的環境や歴史的背景といった点に起因しているように推測されるが、ここではその指摘だけに留めておきたい。

当然ではあるが、グローバル化の展開に連動して、それに適した人材が必要となり、所謂「グローバル人材」の育成が急務な課題となっている。では、グローバル人材とは一体どのような人材なのであろうか。どのような者をグローバル人材というの

であらうか。一般的には「語学力」や「適応力」、「対等なコミュニケーション能力」といったことが連想されるものの、本題をめぐっては極めて抽象的で定義が曖昧なため、諸氏で様々な解釈がなされているというのが現状であらう。

ところで、グローバル人材に関して、実際の受け入れ先である企業側はどのような人材を求めているのであろうか。これは最も重要な前提条件であるはずなのだが・・・一方の送り先である大学側は、本来はそうしたニーズに応じた人材を育成するべきであるとともに、明確な教育方針を示すべきであることは言うまでもあるまい。しかし、その現状はといえば、両者（企業と大学）の間で、グローバル人材をめぐっての相互理解・情報共有が必ずしもなされていないように思われる。

そこで今回、上述したような問題意識をもって、近年日系企業の進出が著しいベトナムを対象に、当国における日系企業の進出状況の把握、及び実際に

当地で活躍されている方々とグローバル人材に関する意見交換を目的として、臨地調査を実施した。以下は、その成果報告の一部である。

## 2 調査日誌抄

本調査は、2013年8月15日から21日の計7日間の日程で行い、その内容は以下の通りである。ちなみに、訪越した2013年は奇しくも「日本ベトナム友好年（日本ベトナム外交関係樹立40周年）」であった。

- 8月15日（木）：広島から台北経由でホーチミン市へ到着する。
- 8月16日（金）：独立行政法人 日本貿易振興機構（JETRO）ホーチミン事務所を訪問する。同事務所の竹山弘明昭氏と面談を行う。
- 8月17日（土）：ホーチミン市内を視察する。
- 8月18日（日）：ホーチミンからハノイへ移動する。
- 8月19日（月）：独立行政法人 日本貿易振興機構（JETRO）ハノイ事務所を訪問する。同事務所の佐藤進氏と面談を行う。  
独立行政法人 国際協力機構（JICA）ベトナム事務所を訪問する。同事務所の清水暁氏・村田顕次氏と面談を行う。  
ベトナム日本人材協力センターを訪問する。同センターの谷上聖子氏と面談を行う。  
ADB コンサルタントの Barry Adler氏と面談する。
- 8月20日（火）：IHI ハノイ事務所を訪問する。所長の吉成龍太郎

氏と面談を行う。

V R E X（VIET NAM RARE EARTH COMPANY LIMITED）を訪問する。同社の喜田英志氏・笹川亮氏・中下義晴氏と面談を行う。

ADB（Asian Development Bank）ベトナム事務所を訪問する。同事務所の Andrew J.Head氏と面談を行う。

- 8月21日（水）：ハノイから台北経由で広島へ到着する。

## 3 ベトナムへの日系企業の進出状況

これまでの日系企業の大きな進出先はといえば、中国であったが、近年の中国国内における諸々の事情、所謂「チャイナリスク」を回避するための「チャイナ・プラスワン（China+1）」と呼ばれる戦略がここ数年顕著にみられるようになってきた。そうした動きもあって、現在ベトナムへ進出する日系企業の数が急速に伸びていることは、新聞報道をはじめとして一般に広く知られるところである。また、2012年12月に第96代の内閣総理大臣に再就任した安倍晋三首相の就任初の外遊先がベトナムであったことは、真新しいニュースである。日本政府がベトナムとの関係を重視していることを内外に大きく示した出来事であるといえよう。

ここでは、ベトナムにおける日系企業の進出状況について、訪越した際に日本貿易振興機構（JETRO）ホーチミン事務所、及びハノイ事務所で提供頂いた資料を基にして、その概況を以下に記しておきたい（日本貿易振興機構（ジェトロ）ホーチミン事務所編 2013、日本貿易振興機構（ジェトロ）ハノイセンター編 2012）。

ベトナムは正式国名をベトナム社会主義共和国といい、人口は約8,877万人（都市部32%、地方部68%）、面積は約33万km<sup>2</sup>（日本の0.87倍、九州を除

いた面積に相当)である。南北に細長いベトナムの国土には、南部にホーチミン、北部にハノイがそれぞれ位置しており、両地域の中心都市である。一般的にホーチミンは経済都市であり、首都であるハノイは政治都市といった感がある。

まず、ホーチミン市については、人口7,681.7(千人)、1人当たりのGDP2,249(ドル)、リテール売上22.101(十億ドル)、外国直接投資累計32.40(十億ドル)である。ホーチミン市は、ベトナム最大の商業都市であり、ホーチミン市近郊への日系企業の進出は著しく、進出先としても主流である。そのためホーチミン市近郊には造成、もしくは造成も含めて多数の工業団地・輸出加工区等がみられる。例えば、Binh Duong省に22カ所、Tay Ninh省に4カ所、Ho Chi Minh市に16カ所、Tien Giang省に3カ所、Ben Tre省に2カ所、Long An省に25カ所、Dong Nai省に24カ所、Ba Ria Vung Tau省に8カ所といった具合である。また、ホーチミン市内の都市鉄道(高架鉄道・地下鉄)、道路(高架道路・ハイウェイ)、港湾といったインフラの整備計画も進んでおり、今後の進展が注視される場所である。

次に、ハノイ市については、人口6,844.1(千人)、1人当たりのGDP2,043(ドル)、リテール売上13.63(十億ドル)、外国直接投資累計21.21(十億ドル)である。ハノイ市は、ベトナムの首都であることから、政府としては政策的にハノイ市近郊に、各国の企業誘致に取り組んでいるという。実際に、ハノイ市近郊への日系企業の進出も年々増加しつつあり、そのためハノイ市近郊にも造成、もしくは造成も含めて多数の工業団地・輸出加工区等がみられる。例えば、Hanoi市・Vinh Phuc省に9カ所、Bac Ninh省・Bac Giang省内に6カ所、Ha Nam省・Hung Yen省に3カ所、Hai Duong省・Hai Phong省に8カ所といった具合である。また、中部に位置するDa Nang市には4カ所の工業団地がみられる。なお、後述するV R E X (VIET NAM RARE EARTH COMPANY LIMITED)は、Bac Ninh省内のThuan Thuanh No.3 Industrial Zoneに所在している。北部のハノイ市・ハイフォン、中部のダナンでは、工業団地だけでなく、物流・交通、インフラの整備計画も

急ピッチで進められ、ホーチミン市近郊と同様に、今後の展開が気になる地域である。

さて、ベトナムにおける諸外国からの直接投資件数と認可額(200年~2012年12月31日までの累計)をみると、件数は14,522件、総額は2105億ドルであり、そのうち日本は1,849件、28,700百万ドルである。また、在留邦人・日本人学校・日本商工会についてみると、在留邦人数(2012年速報値)は南部で5,146人、北部・中部で4,149人、日本人学校生徒数(2013年3月1日現在)は南部332人、北部314人、商工会会員数(2013年3月1日現在)は、ホーチミン日本商工会617社、ベトナム日本商工会(ハノイ)510社、ダナン日本商工会57社といった状況である。今後も投資件数・許可額の増加が見込まれる中であって、当然のように日系企業の進出は今後も増加していくものと推測される。

ベトナムへの投資のメリットとしては、豊富で勤勉で若くて安価な労働力の確保(低コストの割に質が高い)、将来期待できる8,900万人消費市場(インドネシア、フィリピン次ぐA S E A N諸国第3位)、安定した政治(共産党による一党独裁)、宗教問題が発生しない(高い仏教徒比率、宗教で戦争しない国民性)、香港とシンガポールの間地点・中国とA S E A N諸国を結ぶ位置、安い電力料金、大規模な自然災害の少なさといった点が挙げられている。一方のデメリットとしては、原料・部品など現地調達率の低さ(28%)、人材の確保・中間マネジメント層の人材層が薄く比較的高賃金、経済圏が南北に分断しており効率が悪い、賃金上昇・物価上昇(現在は一時的に安定)・マクロ経済運営の経験不足(不安定さ)、インフラ整備のスピードの遅さ・電力不足、不透明な商慣習といった点が挙げられている。また、ベトナムにおける日系企業の主体でもある中小企業の進出のメリットを整理しておく、初期投資が低減可能であるということ。つまりは、法定資本金の制限がない(製造業)、中古製造設備の持ち込みが可能、レンタル工場が多いといった要件である。また、撤退時の損失が最小化であるということ。つまりは、投資活動清算後の本国送金が可能、設備投資の本国持ち帰りが可能であるといった



図1 Thang Long Industrial Parkゲート

要件が挙げられている。

では、ベトナムへの日系企業の進出パターン、及び代表的な企業進出形態について記しておこう。日系企業の進出パターンとしては、ベトナム南部の独資輸出加工型（中堅・中小部品メーカーを中心に）、富士通・日本電産・縫製・部品メーカー、食品加工等がみられ、内需・合併型（販売・食品・流通を中心に）、シャープ・味の素・エースコック・ファミリーマート、イオン、キューピー等がみられる。ベトナム北部の独資輸出加工型（大企業セットメーカーを中心に）、キャノン・ブラザー・パナソニック・デンソー等がみられ、内需・合併型（自動車・二輪）に、ホンダ・ヤマハ・トヨタ等がみられる。そして、代表的な企業進出形態としては、①代表事務所（駐在員事務所）、②現地法人（有限責任社、株式会社）、③提携の大きく3つの形態がみられる。①については、活動範囲はベトナムでの事業計画の促進、市場調査、契約の履行の監督・推進等に限られ、直接の営業活動は認められない。②については、100%外資のものと合弁会社設立・ローカル企業への出資のものとにさらに分けられる。前者は経営権を完全に掌握できるため、これまで輸出加工型製造業を中心に多くの日系企業が本形態で進出した。ただし、出資規制により100%外資が認められない業種もある。後者はパートナーが持つ経営リソース（販売網・不動産等）の活用が期待できる一方で、経営方針等を巡って対立するケースもあるた

め、パートナー選定が重要である。③については、特定サービス産業など外資参入が難しい分野（外食等）において、ライセンス契約や所謂「名義借り」という形態での進出、といったようにそれぞれ特徴が挙げられている。

#### 4 グローバル人材像をめぐって

冒頭で触れたように、そもそも「グローバル人材とは何か」という命題を念頭にして、ベトナムでの臨地調査を進めてきた。今回、実際に海外で活躍されている方々と面談を行って行く中で、各氏がグローバル人材に関してどのような見解を持っているのか、その点についてもお話を伺ってきた。そこで以下、各訪問先で得られた内容の一部を紹介しておきたい（下線は筆者による）。

##### ①JETROホーチミン事務所／竹山弘昭

中小企業の日本人駐在員を見ていると、経理・労務・営業など一人で何役もこなさなければならない状況がある。こうした現実から、大学生に期待することは在学中に一度は外国を体験することだ。ほんの2~3週間でも良いので、その体験が大事だと考える。最近の学生の内向き志向は、中学や高校からの教育に関係していて、大学生になったところで、問題視するというのは可笑しい話である。何れにしても、学生にはもっと興味を海外に向けてもらわないといけない。

##### ②JETROハノイ事務所／佐藤進

自分の経験からすれば、学生時代にはベトナム関係の研究者になろうと思っていたが、何が自分に向いているのか、正直なところよくわからなかった。とりあえず、学生時代には100社を上回るくらいの積極性をもって、会社訪問を行ってみるのも良いのではないだろうか。自分が最初に入った企業でいうと、当初経理を担当しろと言われたが、何が何だかわからなかった。けれども、仕事をやっている中で、どの部署がどれだけ儲けていて、どの部署がどれだけ金食い虫なのかといった企業の全体像がだん

だんと見えるようになってきた。要するに、多くの場合、学生時代には自分のやりたいことがまだ十分に分かっていないというのが現状ではないだろうか。また、それには自分で人生を決めるというよりは、他人が決めてくれることもあると思う。30代になっても4代になっても、仕事は変えることができると思った方が良くと思う。ただし、今このチャンスを逃してはいけないという場面は必ず来るはずであり、そこでは食らいつくという判断はあるのかもしれない、与えられた仕事をやるのに、腐った思いで仕事をするのはよくない。他人のやりたがらない仕事をするのも大事なことである。私の場合、JETROで7年もの間仕事をしてきたなかで、調査団の仕事であるが、経済指標を一つ一つ拾ったりすることもある。そうした積み重ねから、現在のFTA（2国間自由貿易協定Free Trade Agreement）の仕事にも関わるようになっていく。

### ③ JICAベトナム事務所／清水 暁，村田顕次

日本人の芯をもちながら、相手国の実情を知っていることが大事なことである。外国語として必要なのは、まず英語であるが、当地のベトナム語の習得となると非常に困難である。グローバル人材とは、何よりも海外で仕事ができる人だけでなく、日本においても十分に仕事ができる人であると考えている。また、そうした人材が必要である。

### ④ IHIハノイ事務所／吉成龍太郎

グローバル人材と言え、1例として、海外で仕事を統括できる人を一つのイメージとしているが、IHIにあってもそういう人材は何人もいない。営業面で海外のお客様と交渉することも重要であり、事務屋のアドミ業務も必要であり、税金面の対応といった重要な仕事もある。これまで海外進出と言え、商社と一緒に進出するケースが多く見られたが、自らが営業していくことも求められる。これから大学はグローバル人材をどのように育てるのか。ちなみに、韓国では子どもをバイリンガルに育てたいと希望する人が多くみられる。ベトナム駐在の韓国人の中にも、インターナショナル・ス

クールに入れて教育する人がいる。彼らは自分の国の企業だけではなく、外国の企業に勤めさせる希望を持っている。そういった点で、グローバル人材に関しても、これらの新しい時代に求められるものが、次第に変化していくであろうと思われる。結局、学生には、「外国で働きたい」という意欲が必要であり、（大学教育には、それを喚起していくことが求められているのではないと思われる）。

ところで、数日後に地方国立大学4年の女子学生が当事務所に来ることになっている。実はIHIの内定を得ている学生で、訪問理由を聞いてみると、自ら日本企業にアプローチして、夏休みにベトナムにやってきて、インターンをする予定であるというので、とても意欲のある女子学生だと思っている。

### ⑤ VREX／喜田英志，笹川 亮，中下義晴

求められるグローバル人材について、当社の日本人社員10名のうち、実際のところ60代が多いものの、30代も2名いる。どちらかと言えば、国内でも海外希望の人が多くとは思えない。現地で求められるグローバル人材とは、やはり日本の（仕事の）感覚がわかった人ではないかと思われる。



図2 意見交換風景（VREX）

## 5 おわりに

今回の臨地調査で、実に多くの日系企業がベトナムへ進出していることを目の当たりにすることがで



きた。また、こうした動きは今後も大きく進展していくことと思われるが、冷静に注視していきたい。

昨今、大学教育の役割として、グローバル人材の育成が大きな課題となっていることは、周知のことである。繰り返しになるが、ではどのように育成を行えば良いのか。実際のところは不明瞭であり、明解な回答も出せないであろう。今回の聞き取りでも窺い知られるように、グローバル人材に関して、その捉え方は人それぞれなのである。ただし、グローバル化が進んでいく中において、大学では語学力向上はもちろんのこと、少しでも海外への志向を高めるような教育プログラムを模索しなければならないであろうことは改めて言うまでもあるまい。現在、日本中の大学がグローバル人材の育成に取り組んでいるが、その風潮については、聊か疑問があるように思われる。現状では、明確なヴィジョンも持たないままに、ただ闇雲に突っ走っているようにも見えなくもない。

私見では、各大学が独自のグローバル人材に関する教育方針を示すべきであると考え。大学の規模や性格の違いによって、それぞれの教育方針が違ってしかるべきであり、斉一性をもつ必要はないのではないだろうか。例えば、本学（福山市立大学）が所在する福山市を中心とした備後地域は、古くから様々な地場産業が集積し、隆盛を極めた全国的にも珍しい地域である。現在でも、独自の企業経営・技術力によって、全国シェアの高い産業分野が多数みられる。所謂「オンリーワン企業（国内において取り扱う製品または保有する技術が他社にないものを有する企業）」、「ナンバーワン企業（生産量、販売量等が国内シェアまたは世界でのシェアがナンバーワンである製品または技術を有する企業）」が密集している。しかも、その多くは中小企業である。そこで今後、本学（福山市立大学）では、当地域の中小企業と連携したグローバル人材育成のプロジェクト構築と実践を具体的に進めていくことで、独自性をもった教育方針が打ち出せるのではないだろうか。

## 付 記

本稿は平成25年度重点研究「中国地区のグローバル人材像に係る基礎的調査」の成果の一部である。未筆ながら、調査を実施するにあたって、以下の諸氏・諸機関に御高配頂きました。記して深謝いたします（敬称略、順不同）。

猪原 進、柏木崇史、宮田 真、森桶博史、竹山弘昭、佐藤 進、清水 暁、村田顕次、谷上聖子、吉成龍太郎、喜田英志、笹川 亮、Andrew J.Head, Barry Adler.

福山市商工会議所、株式会社 I H I、株式会社ミツトヨ、独立行政法人 日本貿易振興機構ホーチミン事務所、独立行政法人 日本貿易振興機構ハノイ事務所、独立行政法人 国際協力機構ベトナム事務所、ベトナム日本人材協力センター、I H I ハノイ事務所、V R E X (VIET NAM RARE EARTH COMPANY LIMITED)、Asian Development Bank Vietnam office、WORLD BANK Vietnam office.

## 参考文献

- 日本貿易振興機構（ジェトロ）ホーチミン事務所  
（2013）『ベトナム・ホーチミン市近郊ビジネス情報 2013』
- 日本貿易振興機構（ジェトロ）ハノイセンター  
（2012）『ベトナム北部・中部近郊ビジネス情報 2012』

## 付編：2013年度『都市経営学実習』報告

八幡 浩二 榎田 智子

## 1 序言

平成25年度広島県ものづくりグローバル人材育成事業環「国際経営における人材育成と備後企業の取り組み」が実施された。本事業の趣旨は、備後地域（広島県東部）に所在する4大学（福山大学・福山平成大学・尾道市立大学・福山市立大学）が連携を行うとともに、備後地域で海外進出を展開している企業の協力を得ながら、グローバル人材の育成を図るといったものである。

本事業は、全15回の講義と海外研修で構成され、その実施に際しては各大学で単位化を行う要件があったため、本学では「都市経営学特講」と「都市経営学実習」を開講して対応を行った次第である。海外研修期間は、2014年2月13日から2月20日であった。研修先は当初、タイ（バンコク）が予定されていたが、国内の政情不安のため、ベトナム（ホーチミン）へと急遽変更となった。そうした対応に多少の混乱もあったものの、結果としては夏季に実施した臨地調査が大きく活かされたことを付言しておく。

本事業の詳細については、既刊の『平成25年度大学連携特別講座（グローバル人材育成）国際経営における人材の育成と備後企業の取り組み 実施報告書』を参照して頂くこととして、以下では本学における2013年度「都市経営学実習」として、受講生のレポートを紹介してみたい。

## 2 受講生のレポート

## (1) 都市経営学部都市経営学科3年 長峯 伸浩

今回は、グローバル研修という名目でベトナム・ホーチミン市に1週間の滞在となった。

ベトナムは新興国ということもあり、まちの様子に驚いた。交通量や露店の多さなど、日本とはかなり異なる。しかし、今後の成長を感じさせるような都市との印象を受けた。グローバル研修ということで町並みに注目して見ると、ペプシコーラの看板や日本の自動車メーカーの販売店、道路を走る自動車もトヨタ車など日本を代表するメーカーのものが多く見られた。これは郊外へ出ても同じだ。日本との深いつながりを理解するとともにベトナムに海外から積極的な進出があることが窺えた。それはJETROやJICA、その他企業の講話でベトナムへの進出・開発は日本だけでなく欧米なども進めているという話からも理解できた。

そうした中でサンエス、佐藤産業、ムトー精工といった日系企業の現地工場を視察した。どこも非常に大規模な工場の中で現地人が熱心に働き、キャリアアップもしているという。挨拶をすると笑顔で返してくれるなど非常に好感が持てた。考え方の違いからも現地に合わせたマネジメントが必要でグローバル展開には課題も多いと感じたが、生のグローバル展開というものを間近で見ることができ、良い体験となった。また、ホーチミン各地を回ったが非常に文化的なまちだ。歴史がある建築物も多く、日本とはまた違う良さがある。ミトーやクチの各地区は、ホーチミンの歴史や自然に間近に触れることのできる貴重な場所だった。もう少し世界的に評価されても良いのではないかと感じる。食事の方は、好みによる。

1週間という短い期間だったが、予想以上の収穫

があった研修旅行だった。しかし、こうした衝撃や感動を多くの人々と共有できたことが一番の収穫だ。引率の先生方をはじめ、この研修の機会を与えてくださった全ての方々に感謝したい。

### (2) 都市経営学部都市経営学科3年 藤原 広紀

今回は、グローバル人材育成海外研修として2月13日～20日の8日間、ベトナムのホーチミン市を訪問した。タイのバンコクへの研修予定であったが、情勢が良くないということで急きょベトナムのホーチミンへの研修へと変更された。ベトナムと聞いて最初は全然発展していないだろうと思っていた。だが、実際に行ってみるとスマートフォンを持った人が町中にいたり、日本でも見るコンビニやファストフード店、大きなショッピングモールまでできていて、自分が想像していたよりもはるかに進んでいると感じた。しかし、モータリゼーションが進んでおらず、バイクが多く交通マナーが悪く感じたので、インフラ整備が必要だと感じた。また、現地の企業訪問では、ベトナムの方が人件費が安いので、日本のようにオートメーション化された工場ではなく、労働集約型で人の手によって作業されているのが印象に残った。また、ベトナムでは男性はあまり働かなく、女性の社会進出が進んでいることも印象に残った。

観光で一番印象に残ったのは、4日目に行ったメコン川クルーズである。ここではニシキヘビを首に巻くことができたり、ベトナムの民族衣装のアオザイを着た女性が歌を歌ってくれて楽しむことができたので、観光都市としての側面もあると感じた。ベトナム料理に関しては、フォーという米粉で作られた麺や生春巻きが食事に出ることがあり、味は日本人に合っていると感じるものが多かった。しかし、フォーの中にパクチーが入っており、くせのある味がしたので少し口に合わないと感じるものもあった。その他にも、ドラゴンフルーツやココナッツといった南国のフルーツを食べることができたのもいい経験になった。

今回のベトナム研修では日本にいると分からないことを実際に見て知ることができたので、また海外

に行ってみたいと感じた。

### (3) 都市経営学部都市経営学科3年 山下 典子

今回この研修でさまざまな人の生き方、考え方に触れた。それはもちろん今回の研修の目的でもあるグローバル人材を考える上で、まさにこんな人がグローバル人材だろうと思うようなベトナムに住んで、グローバルに活躍している日本人の人もいたが、一番印象的なのはやはり現地でベトナムという自国の発展を考え、尽力している若い現地の人々だ。私たち日本人は働くことが義務であり、しなければならないからする。そんな空気をどことなく感じる現代であるが、ベトナムで出会ったある人からは「こうなりたいから!」や「自分がしたいから!」、そんな理由や目的を持って、それに向かっているというのがひしひしと伝わってくる。また、彼らの“学ぶ”意欲には本当に驚かされた。就職しても昼間働いて夜学校に通うことはよくある事らしく、留学をして他国で学ぶということにも積極的である。実際、現在日本に留学しているベトナム人留学生は1万人を超え、中国を抜くようになっている。英語も日本語も堪能で、日本の歴史や文化もよく知っている。でもまだまだ学ぶことはあるし、もっと学びたい、と私よりも年上の女性が目を輝かせて語ってくれた。こんなに輝いている人が多い国には、日本などすぐに経済でも技術でも追い越されてしまうだろう。

法律やインフラはまだまだ整っていないで、日本人からすれば不衛生で不便なことも多いかもしれないベトナム。綺麗ですべてが整っていて、便利に生活する事が出来る日本。それぞれの幸福度指数はベトナムが世界第2位で、日本が第45位。すべてが満ち足りているのに何とも不思議なことではないだろうか。2つの順位に、日本は便利の上にあるべき幸福がいつの間にか幸福の上にある便利になってしまっているのではないかと教えられているような気さえした。

### (4) 都市経営学部都市経営学科3年 山本 利奈

ベトナムという土地は、日本から直線距離で約



3,600km. こんなにも日本から遠いベトナムで、なぜ日本企業はこの土地に進出するのか。と疑問に思い、この土地が進出先にふさわしいか分析してみた。

中小企業を見学、説明を受けて分かったことは人手が多くいる企業にとって、ベトナムは人件費が安いので魅力的であるということ。日本国内だけではなく、海外まで視野を広げている企業は、世界一の人口がある中国にも所縁があり、これから成長が見込める東南アジアであるベトナムは進出先として候補に入れておくべきだと思った。しかし、海外に進出するという事は日本では無い悩みをもつことにもなる。海外に進出するには、メリット、デメリットをよく考えて行動に出るべきだと思う。ただ、私個人が思うには、日本で経営が難しいと感じてきた企業は海外に進出するべきだと思う。日本で徐々に廃れていくよりは海外に出て、新しい人脈を作る努力をし、市場を広げるチャレンジはやる価値があると思う。また、今回の研修で私は自己を振り返ることが出来た。私は、現在就職活動真ただ中である。研修に行く以前は、周りに流されて就職活動をしていた。しかし、私が働く上で大切にしたい一本の思いをこの研修で自覚する事が出来た。それは、ベトナムという日本とは文化的に違った国に来て現地の方のお話を聞いたことも関係していると思うが、彼らだけでなく一緒にこの研修に参加していた他大学の学生、教員と話した事も大きかった。

私は、この研修中朝目覚めたときから就寝するまで、ずっと誰かと話していた。出来るだけ、多くの人の考え方を知らたかった。その中でも「なぜ、この人生を選んでいるのですか」を多くの人に聞いていた。自分の人生の選択肢が、まだまだ有るような気がしたからだ。様々な人生を聞かせていただいた。私は、日本に帰ってきてから就職活動に関しての心意気が変わった。余裕をもって就職活動に臨むことが出来、企業に対する思いが変化した。ベトナム研修に、私は来てよかったと心から感じた。

#### (5) 都市経営学部都市経営学科2年 伊藤 正樹

今回のベトナム研修の個人的な目標は、世界にお

ける日本の産業の立ち位置を把握することであった。経済成長の最中、都市はその拡大に連れてインフラストラクチャーなどの不足が起き、そこに需要が発生する。ホーチミン市をはじめとするベトナム各都市も同様であった。人口過密や気候地理、エネルギー産出状況など諸要素を根拠として、インフラではまず優先的に交通インフラの需要が急務であり、そのあと、電力事情の改善を始めとするエネルギー事情、そして水事情の質の向上によって、経済および生活水準の向上を都市レベルで健全な手法で図っていくことが希求されている。また、土地に関する費用や権利の問題に関しても、生産ライン進出の際の条件として念頭に置いておくことの重要性が考えられる。また、商都として大きく成長しているホーチミン市は、その意味でも進出先として重要である。今回、ホーチミン市を訪れて、それらの経済成長の動向を目の当たりにすることとなった。

発展途上にあることで、労働に際し、人々は発展に向けて非常に前向きである。「日本人が現地の方々に対して気を付けること」を問うたとき、「より厳しく」の回答を頂いたことで、私は驚き、見習うべき姿勢であると考えた。成長の伸びしろを失くしつつある日本に比べて先が明るく、現地の方々の個々の成長志向が強い。日本人の私としても、負けていけないという現実を実感することとなった。しかし対照的に、ホーチミン市内中心部の一等地、多くの人々が往来する目の前で、公務中の警察官が煙草の箱を公道に棄てる光景が見られるなど、公共性の概念にやや欠ける一面もあった。

しかし、成長への意識は強烈であった。東南アジアの成長性に対し、日本人の一人として、経済競争に際し、私もうかうかしては行かないという意識を持つに至った。この経験を確実に成長につなげていくために、今後の行動が重要になってくると考えている。

#### (6) 都市経営学部都市経営学科2年 今田 もも

海外研修がベトナムに決まった時、私はベトナムのことをほとんど何も知らなかった。大体の場所と、フォー、ベトナム戦争、発展途上国というイメ

ーじしかなく、海外に行ける楽しみと同時に、いったいそのような国に行って何を勉強するのだろうと思っていた。事前に自分でベトナムのことを調べたことも、ガイドブックを買うことさえもせず、学校で配られた資料に軽く目を通す程度だった。引率の先生方や乗務員の方がいるからと、安心しきっていた。

実際に空港から出てベトナムの街を見たとき、立ち並ぶ高いビルと、日本と何ら変わらない都会の風景に驚いた。ベトナムに行く前に、予防接種をしたほうがいいのかと心配していた自分がとてもばかばかしく思えた。水道水が飲めないこと、少し奥地へ入ると舗装されていない道が多くみられること、車よりバイクの量が圧倒的に多いこと、観光客を狙うスリやひったくりが多いことなど、発展途上を感じさせるところはいくつかあったが、それらが全く気にならないほど、ベトナムは都会だった。

そしてたくさんの講義を聞いて、自分の無知さを思い知った。発展途上国だから自分の中で印象が薄かったのではなく、ただ単純に私が世の中のことを何も知らず、知ろうともしておらず、勉強不足だったと反省した。第二次世界大戦後、急速に発展を遂げた日本を尊敬してくれていて、今でも日本人のことを尊敬してくれている人が多く、日本語を話せる人も多い。日本人はすごい、頭がいい、日本はいい国、と喜んでくださる方がたくさんいた。働きながらセカンドスクールに通うほど、ベトナム人は勉強熱心だということも分かった。それに比べて、当たり前のように大学に通いながらも大した勉強もせず、遊び続けている私は、この話を聞いてとても恥ずかしく思った。勉強しようと強く思った。

そして、工場で働いているところを実際に見たときは、まるで昔の日本を見ているような気がした。大勢の人たちが同じ場所で単純作業をこなす姿をみて、先進国と途上国の働き方の違いを実感した。日本で使われている電気製品の部品や衣服の多くがベトナムで作られていて、私たちの生活はこの人たちに支えられているのだと気付いた。今はベトナムの人々が作ってくれているが、これからベトナムがさらに発展していくと人件費も上がり、オフィスワー

カーの人数も増えて、工場で見たとような光景は見られなくなるのだろう。そしてまた人件費削減のために、企業は別のところへ進出していくのだろう。

今回のベトナムへの海外研修では、本当にいろいろなことを学ぶことができた。ただの旅行ではできないことが経験でき、実際に見なければわからないことがたくさんあるとわかった。機会があればぜひ、またベトナムを訪れたい。

#### (7) 都市経営学部都市経営学科2年 桑田菜瑠美

「ベトナム」は、私が想像していた「ベトナム」とは大きく異なっていた。まず、ベトナムの交通状況は日本に帰っても強く印象に残っていたことの一つである。ベトナムは、賃金に関してバイクがすごく多いということ、また信号がとても少ないということや横断歩道がない状況が顕著に見えた。最初は信号もなく、歩道もなくたくさんのバイクが次から次へと割れることもなく走っている道路にとっても困惑した。二つ目に私が気になったことは、ベトナムの人たちの性格や気質であった。ベトナム人は、非常にプライドが高く、感受性が強いという国民性で、かなり体裁にこだわるという部分もあるが、すぐに誰とでも仲良くなるという人懐っこい一面もあるという。

ベトナムで過ごした中で、ベトナムの人の性格についていろいろ触れることができたが、一番強く感じたのはベトナム人は本当に勤勉だということだ。たくさんの人々が、勉強ができることは幸せだと感じており、働いてもなお夜間学校などに通っていたり勉強を怠らないのである。それは、ベトナムの幸福度のランキングの順位がとても高かったということに関係している。それに比べて、日本の順位はとても低いものであった。制度も保障もあり、求めればほとんどのものが手に入る現代で、日本人の多くは自分たちが幸福だとは思っていないのである。ベトナムの人たちが幸せだと思うことは、家族や兄弟などが皆いて元気で生活できることという回答であった。これは、日本人はそんなことは当たり前にあることだと思っていて、わざわざ幸せだなんて考えもしないことではないだろうか。

私は、今回海外研修という機会をいただいたことで、やはり本やテレビのイメージと現地の状況は大きくズレがあるということを感じた。今の自分たちの状況などを把握し、今自分は何をしなければいけないのかということを考えながら生活しなければ、成長を続けるベトナムに日本が追い抜かされる日も近いのではないのかと考えさせられた。

#### (8) 都市経営学部都市経営学科2年 小林千恵

今回参加した都市経営学実習では8日間ベトナムで現地研修をし、グローバル人材について考えるいい機会となった。日本にいては決して感じる事ができなかった現地の雰囲気を感じることができた。8つの講話や視察の中でも、コンサルタント講話が最も印象に残った。現地の方の生の声をきくことができたからだ。日本の中小企業のベトナムへの進出を支援しているこの企業では日本人をお客様にしていることもあり、現地の女性の日本語はとても流暢であった。男性は計画性が無く一攫千金のところがあるため、女性の方が重要職に居ることとベトナム人は勤勉であることを知った。

たくさんの研修の場があったが、グローバル人材に必要な要素については、同じような回答が多かった。第1に、簡単な会話が以上のコミュニケーション能力だ。通訳を通すと情熱が伝わらなかったり、微妙なニュアンスの違いが生じたりしてくるのだ。第2に、やる気と元気だ。何のためにそこにいて、何をすべきなのかをしっかりと考えなければならぬと感じた。第3に、現地の衣食住に適応できるかだ。日本から海外に進出するうえで、食問題は避けられない。ベトナムでは、イオンが進出しかけていることもあり、今後日本の企業が増えることも予測されているらしい。

最も共感できたのは、“相手と対等の立場に立ち、比べない”というものだ。自らが現地のことや相手のことを知ろうと歩み寄らなければ、知ることもできず、信頼関係も生まれぬと感じたからだ。多くの研修先でグローバル人材について伺った際、この答えが出ていなかったのは、当たり前のように行われていたからだろう。講話や企業訪問の際、

「ベトナム人は勤勉である。親切である。」といった言葉をよく聞いた。確かに立場的には対等というわけにはいかないかもしれない。しかし、人として互いに尊重し合っているのだろうと感じた。

私は今後の生活において、勝手な先入観で区別するのではなく、苦手と感じる人であってもまず知ろうと歩み寄ることと、世界へと視野を広げていくことを意識したいと考える。

#### (9) 都市経営学部都市経営学科2年 齋藤未早

はじめに、私は今まで、タイ、カンボジアを訪れたことがあり、今回のベトナム訪問は、私にとって、東南アジア3カ国目の国となった。東南アジアは、国同士が隣接しているにも関わらず、経済発展の様子はその国々で大きく違っている。しかし、日本に比べ、人々や町に活気があり、ビジネスチャンスにあふれた地域である点においては共通すると思った。私がベトナムでもっとも魅力的に感じた点は、ベトナム人の教育に対する姿勢である。ベトナムでは、識字率がほぼ100%である。ほとんどの子供が学校に通い、最近では大学や留学に行く人も増えてきている。さらに驚かされたのは、働きながらセカンドスクールに通い資格を取る人も多いということだ。「日本の戦後復興にあこがれて日本語を勉強し始めた。ベトナムも日本のような国になってほしいという希望を持ち日々頑張っている。」というベトナム人の女性の言葉は、非常に印象に残っている。このように勤勉な人びとが多いベトナムでは、今後多くの優秀な人材が出てくることが期待できる。

また、ASEANの関税撤廃、東西経済回廊、南部経済回廊の完成をきっかけに、国同士の交流が盛んになり、国境が自由に行き来できるようになると東南アジアは、ますます経済発展の可能性を広げることができる。そのような中、日系の中小企業は、日本の人口減少に伴う労働力不足を補うために、豊富な労働力が揃う東南アジアに頼らざるを得ない状況にある。東南アジアにあふれているビジネスチャンスを確実に手にすることで、中小企業は成功に導けると考えられる。このように今後、東南アジアは、

世界を牽引していく存在になっていくであろう。

最後に、今回のベトナム研修で多くの企業の方からのお話をお聞きし、グローバル人材とは、相手国の人とコミュニケーションがとれ、その国の文化を自ら受け入れることができる人であると私は考えた。

#### (10) 都市経営学部都市経営学科2年 多田 彩乃

今回のベトナム研修を通して、私はさまざまなことを吸収して帰ってくることができました。毎日新しい発見があり、多くのことを学んだ。

クチの地下トンネルでは、ベトナム戦争でのゲリラ戦について学んだ。クチはベトナム戦争時、アメリカ軍とのゲリラ戦の場所になった。地下にはとても狭いトンネルがあり、地面には中に針や仕掛けのある落とし穴、地下から隠れて攻撃する切り穴など、自分たちの特徴を活かした攻防で村人達は戦ったという。切り穴の中に入れてもらったが、身長の高めなわたしでも結構狭く、蒸し暑かった。また、トンネルもかなり狭く真っ暗でとても動きがとりにくかった。

また、ホテルでの講話で、JICAの方の話やベトナムの女性の方の生の声を聞くことができ、トナムの女性の向上心の高さや努力に感動した。

サンエスは、主に電子機器の部品の下請けや、繊維類を製造している会社である。電子工場も繊維工場も、種類ごとにさまざまな部品がならんで流れ作業になっており、いわゆるライン生産方式となっていた。それぞれに役割が決まっており、単純作業の繰り返して大量生産を行っているようだ。こういう場面を実際に見て、昔の日本もこのような感じだったのではないかという想像がついた。

それから、ベトナム料理は日本食と似ている部分が多く、食べやすかった。魚醤は少し匂いが気になったが、米や魚介類を食べる文化や、味付けも辛すぎたり甘すぎたり感じるものは少なく、日本人の味覚と似ていると感じた。そして、ベトナムの街をいろいろ見た感想としては、とにかくバイクが多いと思った。信号もあまりないし、道も整備されきっているわけではないので、常にあまり速い速度では走

れないことが分かった。

この8日間で、日本とは違った文化にたくさん触れることができ、視野が広がった。また、昔の日本を感じることもできて、とても良い経験になった。

#### (11) 都市経営学部都市経営学科2年 中村 拓弥

ベトナム研修からわかったことは、国内産業空洞化論と海外進出は関連性を持たせて議論することはあまり有効ではなく、また海外進出していった企業はすべての企業が安い労働力、安い賃金を理由に海外進出したわけではなく、サンエス株式会社繊維事業のように国が豊かになるにつれ、国内では繊維業は成り立たなくなってしまう産業の問題や、提携先の企業が海外進出し、それに付随する形で海外進出した理由や、佐藤産業株式会社のように生産施設を100%海外にすることは空洞化するかもしれないが、物価の安く規制にあまり厳しくない国の方が思い切った工場の設備投資を行うことが出来るメリットがあるという理由で海外進出した企業であることなど、各企業・各産業によって理由が異なっていることが工場視察からわかったのである。このことから、国内産業空洞化問題と海外進出を同一的に関連付けることは困難である。

また、ベトナムは輸出加工型市場から消費市場へと移り変わり始めていることが現地を視察してよくわかった。工場団地だけではなく、イオンモールがホーチミン郊外に進出していること、日本食レストランがホーチミン市に多く出店していることなどから、消費市場に移り変わっている根拠になっている。特にホーチミン市は一人当たりGDP 3,000USDを超え、モータリゼーションが起きることが確実にとなっている。ベトナムという「バイク大国」から車へ買い替える動きも、徐々に顕著になっていくに違いないと思ったのである。

最後に、中小企業にとってもベトナムに進出することは進出時のリスクを低減化できると確信したのである。進出時に調達すべき資金は、日本政策金融庫を通じた優遇利率の融資を利用する、法定資本金の制限がない、中古設備の持ち込み可能、レンタル工場が多いなど初期投資は最小限にすることもでき



る、また仮に事業に失敗し、撤退を余儀なくされた場合でも、投資活動清算後の本国送金可能、設備投資の本国持ち帰り可能など撤退時の損失も最小限に食い止められるのである。日本の金融機関のサポートもベトナムでのサポートも充実している環境下で、産業の空洞化を気にして進出しないことはもったいないことであると思っただのである。

#### (12) 都市経営学部都市経営学科2年 広岡まこと

グローバル人材海外研修に行くまで、私はベトナムの人口や経済状況や位置等、近隣諸国との関係や歴史的背景について何も知りませんでした。海外研修の予定地がタイだったのが変更になってしまったということもありますが、私を知るベトナムはフォーと生春巻き程度でした。インターネットで「ベトナム」と入力して出てきたのは、首都はハノイにあり社会主義共和国体制をとり、長い中国の侵略を受けフランスによる植民地化、越南戦争でアメリカからの介入、またベトナム人の親日感情はとても熱いということでした。浅はかな知識のまま研修に行ってしまったことは、ベトナム一経済的に発展する都市のホーチミンという都市を目の当たりにした時、悔やむばかりでした。なぜなら、人もビルも多く、活気は溢れんばかりの様相が目の前には広がっていたからです。

そして一日目は、移動と現地にて円からベトナムの通貨ドンに両替することと、夕食後ホテルに移動の流れでした。両替所では、5千円を渡すと100万ドンが返ってきました。それを持って夕食のレストランでドリンク代を払う時は、普段使わない0の多さに戸惑いました。また、二日目には日本貿易振興機構（JETRO）へ行き、ベトナムという国の説明から、主に首都のハノイ市とホーチミン市近郊への企業招致を行っているといった細かなことまで説明を受けました。三日目にはベトナム戦争での遺物として残されている、クチというところの地下トンネルへ行きました。実際に入ってみたら、暗く狭く恐怖感のあまり、途中で出てしまいました。四日目はメコン川のクルーズと観光をしました。五日目から七日目までは、午前中はホテルにてコンサルタ

ントの方やJICAの方による講話があり、午後からは企業訪問をしました。家具の製造の佐藤産業、金型及び工作機械の製造を行うムトー精工、繊維業から始め電子モジュールを手掛けるサンエス、それぞれの企業で活躍されている日本人の方々は、会社に行けと言われたから来た等とおっしゃられています。逆を言えば、日本にある会社で仕事の実績を認められたごくわずかな方々が海外への赴任を担われ、現地の人と働いている姿は、言葉は簡単かもしれませんが、かっこよかったです。

#### (13) 都市経営学部都市経営学科2年 松浦未優

私は、ベトナム研修を通じて、グローバル人材に必要な要素を知りたかった。講義では、会社の社会理念や技術の教育が困難であることや、賃金上昇、という問題が上まっていることを学んでいた。そして、事前学習の講義では、知ることのできなかつた現地のことを肌でみて感じることで研究したいと感じていた。

実際に工場見学をしてみると、会社の至るところに経営理念や顧客を思う気持ちが掲げられていた。また、日本語が流暢な現地人の方も多くいた。私は経営理念など日本独自のものであり、伝えるのが難しいと考えていたが、現地の方の勤勉さなども踏まえ、ベトナムでは伝わりやすい環境ではないかなと感じた。また、賃金上昇はどこの企業も頭を悩ませているところだといわれていた。福利厚生を厚くして、働き手の環境を整えたり、効率を高めたりすることで補っていきたいと考える企業もあった。

そして、ベトナム研修は企業研修だけではなく、観光や平和学習も行った。私はベトナムという国をよく知らなかった。私は町が汚く、物乞いや貧困のひとが多い国だと思っていた。しかし、現実にはバイクの交通量が多く車も多く通るのだ。大きなビルも立ち並び、きれいなホテルも多く立地していた。私は、ベトナムの位置さえわからない知人がいたりするほど、ベトナムを筆頭とするASEANの国々について理解がなかったのだと感じた。そして、最近では、観光地としても栄え、多くの日本人観光客も目にした。



これらを通して私は、グローバル人材になるためには、自分の意見を発言し、海外について知識が必要だと感じた。これは、グローバル人材だけではなく、来年から始まる就職活動にも必要な要素だと考える。私は、多くの知識をつけるとともに、海外に目を向けていきたいと感じた。

#### (14) 都市経営学部都市経営学科2年 吉村侑実

2014年2月13日～20日に行われたベトナムでのグローバル人材育成海外研修に参加した。研修では、様々な場所への視察や、企業訪問・講話を通じて、実際にベトナムを拠点として働かれている様々な方々の話を聴くことができた。四大学が連携した研修ということもあり、他大学の方々との交流や意見交換が可能なこともこの研修の魅力であったと思う。

ベトナムという国に関しては、研修中に過去・現在・未来の全てを視て、聴いて、学ぶことが出来たように思う。その上で、ベトナムの今後の可能性の大きさを感じ、その分、日本を含めた先進国が支援・協力して、懸念されている課題を克服していく必要があることを理解した（ベトナムがそもそも持つ強み（地理・政治的安定・国民性・労働力など）に加え、現在のインフラやガバナンス等の整備・強化、今後のASEAN域内での経済統合は、日系製造業の拠点としてだけでなく消費市場としての可能性の高さを表している。それに伴って、課題や懸念されている事項も数多くあり、それに関しては、日本をはじめとして先進国がベトナムに協力し、持続的成長を支援していく必要がある）。

グローバル人材育成ということが目的であった今回の研修で、グローバル人材の要件を様々な場所でそれぞれ実感したが、その全てが正解なのだろうと感じた。その様々な要件の多くは、自分自身が苦手とするものが多く、今後の生活の中で、少しずつでも自分自身を変化させていくべきだし、していこうと思った。それはグローバルな世界でのみ必要となる訳ではなく、自分が将来どのような職種に就くことになるだろうとも、必要なことである。もしくは、重なる部分が多くあるのではと思うからである。今回

参加したことが、今後生かしていけるよう、これからの生活の中で努めていたいと思う。

#### (15) 都市経営学部都市経営学科2年 若桑悦子 ＜ベトナムの概要＞

私たちが訪れたホーチミンは、2011年に一人あたりのGDPが3,000USDを超え、現在道路を走るのはバイクが中心であるが、モータリゼーションが起り、今後車の数が増えるとされている。進出日系企業数は、首都ハノイは約500社、商都ホーチミンは約660社であり、私たちの暮らす備後地域の中小企業も進出している。一方で、貧富の拡大、汚職の蔓延などの問題が顕在しつつある。文化的な面では、ベトナムは女性上位の国で、途上国でありながら、男女平等指数が高い。男性よりも女性の方が真面目であるという印象を受けた。食文化はフォーに代表されるように米が中心である。脂っこくなく、タイ料理のように辛いわけでもなく日本人向きである。この研修では、フォーや生春巻きなどのベトナムを代表する料理を食べることができ、ベトナムの食文化についても学ぶことができた。

#### ＜現地働く日本人の方々からのアドバイス＞

- ・外国の人とコミュニケーションを取るときは、通訳を通さずに、片言でもいいから自分で伝えること。
- ・コミュニケーションを取るために最低限の英語力を身につけること。打たれ強いと。
- ・勇気をもって意見を言える、行動できること。
- ・衣食住においてその国に対応できること。
- ・日本人は尊敬されているが、個人が尊敬されているわけではなく、自分個人を認めてもらうためには努力が必要であるということ。

#### ＜まとめ＞

今回の研修に行くまで、私はベトナムがここまで経済成長している、日本企業がたくさん進出しているということを知らなかった。高層ビルがたくさんあり、人口も多く、とても活気のある国だった。ベトナムでは、海外に留学するとなるとお金がかかるので、家族総出で支援し、送り出される側は周りの期待を背負って勉強しに行くという話を聞いた。

この研修を通して、私たちはとてもめぐまれてい

て、勉強できることに感謝できていないことに気づかされ、とても刺激を受けたので、残りの大学生活を絶対に無駄にすることなく、自分の目標を明確にしてそれに向かって勉強していきたい。

#### (16) 都市経営学部都市経営学科2年 渡辺さつき

2月13日から8日間、ベトナムに滞在し海外研修を行った。ベトナムに実際に行くまでは治安が悪そう、不衛生そう、日本人に合う料理がなさそう、とあまり印象は良くなかった。しかし、8日間滞りして印象はガラリと変わった。

ベトナムへ到着し、空港から出ると、予想をはるかに超える街の発展具合に驚きを感じた。町はネオンが眩しく、人々にでぎわっていた。これから始まる研修に期待に胸をふくらました。第二日目でJETROを訪問、ベトナムの基本情報について学んだ。この国は、GDPが毎年約10パーセントずつ上がっており、大きく経済成長をしている。しかし、現地調達率は未だに低く、技術の高いものを輸入し、それを組み立てるという作業が主に行われているそうだ。第五日目のAGSコンサルタントによる講話でも基本情報について学んだが、共通して言われていたことは、この国には“人材”と“インフラ”が不足しているということである。経済が急成長しているからこそ、基本的な部分を見直し、まずは土台を強くしていくことが大事だと私は思った。第三日目の夕食はディナークルーズで、外国の方たちと話す機会があった。ベトナム人の夫妻と英語で会話したこと、韓国から修学旅行で来たという高校生の子たちと身振り手振りで会話したこと、私にとって大きな経験となった。どんな人とも会話できるということは、グローバル人材として必要なことだと思う。第五日目から三日間、工場へ直接視察に行き、目で見て、そこで働く人たちのお話を聞き、多くの事を学んだ。工場で働く日本人の方々からアドバイスをいただき、グローバル人材として必要なことを理解する事ができた。自分の殻を破る勇気のある者、前向きで夢を持っている者、どんな国に行っても現地の人の目線になって仕事ができる者、これらができる人が必要な人材である。

この研修で得た知識を活かし、勇気をもって何事にも挑戦していこうと思う。

### 3 総括－課題と展望－

この度の研修は直前になって渡航先の変更という事態にはなったものの、受講生にとって概ね有意義だったといえるだろう。研修は、企業や国際関連機関に勤務される方からのレクチャーを主とした国際経営研修と、現地の人々の生活を垣間見ることを中心とした文化交流研修の二つから構成されたものであったが、それぞれの研修プログラムの内容が互いに良い影響を及ぼし合うことで、受講生にとってより深みのある経験になったのではないだろうか。

これまでの生活の中で触れ合うことのなかった人々や、あまり関心のなかった土地に対して、強い知的好奇心をもってプログラムに参加した学生が多かったと感じられた。国際経営研修において熱心に話に聞き入るだけではなく、特に積極的に質問し対話を試みようとする本学の受講生達の姿はとても頼もしいものであった。また“アジアにおける日本の存在感について現地の人と意見交換をしてみて、驚きであったと同時に良い刺激になった”、“国内にいてだけでは日本の姿はわからないと思った”、“国際社会にもっと関心を持つべきだと感じた”と話す学生が複数いたことも、国際社会を知るといって本研修の目的が達成され、彼らにとって良い成長の機会が提供されたことを物語っている。

今回の研修に際しては「都市経営学特講」で扱われたタイとは渡航先が異なっており、研修目標の達成という点で若干の不安があったが、幸いにして受講生の高いモチベーションによってそれをクリアすることが出来た。しかしながら、学生の知的好奇心の強さ、現地への関心の高さが研修の効果を高めることは明白である。事前学習の内容と現地での研修内容をどのように整合させていくのかが、より内容の濃い教育プログラムを構築する上で重要となるだろう。

## 付 記

本事業、及び特講・実習を実施するにあたって、以下の方々にお世話になりました。末筆ながら、記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。

米田 博，羽田 裕，堀田誠三，原田裕治，石田 実，甲斐健太郎，入谷 純，尾田温俊，小川 長，芝田全弘，村社 隆，猪原 進，小畑和正，井上俊夫，酒井利文，長瀬太志，山下抄一，河原光伯，北村明淑，小山寛二，谷屋久幸，大元克俊，向畑充祥，大本訓司，藤原浩三，西田良司，松尾雄二，佐藤文美，佐藤友彦，矢野十和子，HUYNH KIM LOAN，NGUYEN TRONG VAN，LE NHAT TAN，TRAN THI KIM TRANG.

株式会社 サンエス，WONDERFUL SAIGON ELECTRICS Co.,Ltd.，WONDERFUL SAIGON GARMENT CO.,LTD，MUTO VIETNAM CO.,LTD.，SANKYU(VIETNAM)CO.,LTD.，SATO SANGYO VIETNAM CO.,LTD..



図3 JETROホーチミン事務所にて

A View on Necessary Education and Training in Time of Globalization; through the  
Cases of Japanese Industries in Vietnam  
– With participants' reports “Practical Seminar in Urban Management”  
for the school year 2013 –

Hiroshi YONEDA, Koji YAHATA

This is to report a view on necessary education and training in Japanese universities in the era of globalization. Japanese industries were strong in 80's and 90's, and even thereafter they enjoyed their sales and manufacturing operations domestically or even locally within Japan, but now they cannot help but deploy their overseas operations in such a global business environment where demands are stronger and supplies are more competitive. Japanese industries are, therefore, expected to hire such university-graduates as more trained in foreign languages, more used to multi-cultural communications, much stronger leadership and so force. Those university-graduates are candidates for “suitable human resources in time of globalization (GURO-BARU JINZAI)”.

Educational institutions, central or local, including the Fukuyama City University (FCU) are now in a position to respond to those educational and training needs that might be required by Japanese industries. As a matter of fact, because such human resources are not concretely defined in industries or even in educational institutions, more discussions are expected to take place. This report, therefore, seeks purpose, ways and means of university education and training, particularly in the FCU.

Keywords : human resources in globalization, Japanese industries in Vietnam